文久記事

五

內閣文庫
和書
類 三一七三三 號
一五 冊
一五 函
三 架

史 六八

內閣文庫
番號 和 31733
冊數 15（ 2）
函號 151 12

国立公文書館
National Archives of Japan

文久二戌六月阿州侯ゟ上書之写

不肖之私不顧
御大政御変革中にて恐多奉存候得共以書取申上候
内外之筋二三ヶ条奉申上御賢察之
奉希候
御近親之御列座にて幕職御免之上御辞
是迄之御仕来にて御先規之御例も可有御座候得共
殊ニ十ヶ年来天下之形勢動変
之変化ニ
幕府において御政道を改させられ候ては不忠之

事々
神祖　御治績之　御宏基堅固にして
日新寛裕にして邦家之計に修短割形之法
行はれしに後又交易通商　御許容を
東方より深策にて東方より以来是より以来
しかも彼我正大之道を失ひ彼より申立て所謂
を何のしかし通信之を以て非に滅亡之
暮方はり　御修彼方行にて　後
御寛容之御日本御据要之地之患
巨大之港を開き甚情然人々痛嘆
之徒人を至当と
管轄之御代之以て皆之
御時今を周備苟且之以来之出之真
嘆息之様御之推移
織之鑑之御府内に於て
彼より粮穀之下に
襄嘯以下容易事柄中々人
不被輕以其
勅使来向之
勅後御紙来事之

御失体之段恐入候得共
叡慮ニ被為在候而ハ御誠意をも被為感候ハヽ御取計
此上ハ何卒天下之耳目ニ相成候様御仕向ケ可有之候と
其外ニ於テハ別而相心得候而公武之義ハ和不和
皇国之治乱安危ニ相拘り候事ニ付其段別而厚く
被為在候御一和御満足之
御思召之趣ニ被為在 廟堂之御依頼被思召候て
万年穏安之道を立させられ候様相成不申候而ハ不相成
候ニ付御布告之宸襟を安め奉り十分之事ニ
ハ実事をもつて一新之天下と被成候ハヽ此上措置之

窮之国運を 御保ちニ相成候而今般徳川家
御返上之義ニ付確執を生し其上仁義ニ相悖り候而
皆々挙兵して三州之民を塗炭ニ陥らせ候事
此度ニ付而ハ朝廷之御事ニ付 大典を
御取扱被為在候ニ付人材を選ひ 御国政を定め
諸大名之衆人を撰ひ衆論を以て公平を
失ハさる様之事
宸襟を安んし奉るへき事
神祖之 御遺訓を継せられ候て公武之
御忠孝之道を相尽し御奉公被成候様被成下度一統奉願候

居候前中納言殿ゟ田安殿江御問合被成候
趣ニ付御存寄之次第　御尋御親く
御為存候而　右段申上候様ニ
御一門之御道一和ニ而天下之御安全之御基ニ候得ハ松
平越中守殿御委任之御儀も実ニ御猶予之事ニ有之
候而松平家之要路之御方々ニ而も右之時節柄
御座候而其上ニ御附添被成候而至り候得共実
東之ゟ入夢　御急ニ候而御一勢之御備向
松平大膳大夫殿杯も御家之儀ニ付遠慮御家来衆
者兼而御沙汰も被成候御座候ニ付右之通

所　趣ニ付御何角　御尋申上候　右之一段御座
松平加賀薩摩仙台家臣大小旗本之東都御々
間時々全国之御休戚ニも係り候儀ニ付旁以御答
候ニ御座候而之下ニ付奉存候其他万端之儀
大小名親藩も時節柄之儀ニ付其外ニ至り候
まても被遊御利害　御尋奉答　候得
御勤御座候而　下々恐入奉存候　決而之御座候
之儀ニ付右志以被為下候而御答申　同様之
御座候而　奉伺候　此段右中納言殿
松平越前守不取敢　村識之儀申上候也

建白致し並に候もの有之候得共御斟酌無之儀
賞罰之儀在之候得共何分山陵之事にて
此度於京師大議起り候て遂に此度之儀
に相成候得共何卒御通し令國忠義之士を被為
御無倫之御用に於て相拒候人於ニ御座候　精々
此節之御威光　勉励仕　三年之間精々御遂之事
御治世上
天子より下万民に至る迄御至誠を尽し候道
理も有之候得共　利に二字之欲乱の根元にて
実に御信用にて御拾之　此節御沙汰も無之候ニ

在之候ても外に攘夷之儀無之候へとも被仰付候内に御座候
乍恐静謐の儀には全く天下無事の年に相成候ことし
後代に至り候て御沙汰も有之候に付今更申上候も恐入候へ共
只思召之程も何とも何分にも一同御遠慮仕候て
彼の切支丹之如き應世之道は無之儀に御座候
尤も夷人共之輩に候ても
御威徳之御儀は一統にても御遵奉仕候て
皇国之御為　御威徳を以て海外迄も御輝きて
中外迄も何分に利害を顧み候て
安穏に実績

御徳ヲ慕ヒ奉候へ共 何卒当今ニ至リ情状人々
尊攘之説ニ付尚更公議ト申候者共有之候

一 世上之風聞承リ候ニ
皇妹御縁組之儀ハ
公方様御上洛ニテ御取結
京師も兵衛 御警衛ニ付
其上此度御承知 公武之御実意ニ付テ君臣
御増當之御祝儀御取組之處 整備被成

武家未曾有之盛典ニして 御當家之御栄光
此上無之 御先祖 幕府ニ有之 大小侯伯士庶
ニ至ル迄欣悦踊躍之徳ヲ仰キ奉ルへく 一同御祝
御婚儀之御上ニ迄ニ 御上洛ニ相成 御縁組
天朝ヨリ被仰出候 御増當之御儀
公武之御親睦ニ而 益御安泰之御儀ニ可有之
候得共 御合躰之御趣意ヲ以 御治道ニ相成候様被仰出
実ニ
大樹公様 御大切之御儀ニ付 一層御尽力有之候ても
然ルニ 此度さらに御上方へ御参府 猶御取極之儀

と誑し海防多塵に付余計不申り遠く又絶し
無其上華せしも是も才一度之に御經費又莫
大して軍国に御取締手て関係之事と存候
大小名に羅敬宿役人を之音信も少年して
不申候且外患孔熾之節と八軍艦并
器械之御製造又要塲之御築造大小砲之御備
造之義専要之御取扱不容易之事
勢と有之候得共御合之由御座候思召之通ニ而
御上洛之御中尚御付御所之御様子被為成候御渡
御右件之義御前来中して御年来之御取

御旗本之御座敷に鉄鎚八万之金御国元藩所
惣して其御營繕遠く之行之時之一徳涂池之入取
替之上之事之御之時之世子日経之定門之
經歸大之件之遂一
御参府之事せしまで下之事御私情之御
奉之通御武備之事てり下小同之時之待
せし之上御取之事
一　重臣之上之御領料御費之處之取之
奉之御領之當人之之世柄之て之由下之
少在之之御旅金之来てし之有採益之武家之

任せ候迄無拠次第ニ候得共、左候而ハ文
御所向御経営ニ不少御遺憾被為在候處
十ヶ年来諸物價騰貴して却ニ衰微ニ
四民之御為ニ候ハ御欽定之御事ニて候得ハ
其筋之者共へ何卒四民安堵仕候様御備有之
度候ニ付御免し出候様ニ奉存候

一 王室御代々之山陵も泉涌寺清収之外古
を西之郊ニ在之候處甚しく荒廃五年間ニ云を定
免或ハ湮没して其所を失ひ候ものも
有之由ニ候得共右御捜索之上古例之通

之不可同日ニ論し御座候ニ付
皇国忠孝之風相廃し候てハ川紀しく御奉公も
不相成事ニ候何卒関東ニ而も御修復有之
御世話も有之候ハヽ天下御崇敬も御行届
祖宗ニ於てハ孝道を尽させられ候て
御祖霊御尊久之御基ニも可有之と奉存候

一 方今海内之形勢ハ根底を動揺仕候得共
其人情悲慨之気ニ而其帰を失ひ候も難計
猖獗を憤嘆いたし一命を捨て暴挙を生し
廟堂之御策としてハ懐柔し御安和之御世

しかるに猶又相手方を討て主の所存を不
勤弁に存し候とも兎角身命を擲
御国恥と存し家の情実にて憤て死して
当時も其身は本望をとけ忠律和を
業所によりて御掛も全太く御紙面にも
これら等
主の深志相立を相濟流石も当事の趣
全く道御法度を犯し候段は
ゆへ免し其身の罪は御科に不被仰付
これ計の段は彼是の場合に於て相成候

必竟国家の政何等の変にも然しも罪せ
大猷院様御代ゟ以来之儀も今に至迄忠孝を先に
とて此者とも御に任せたる一揆平定の時に当り
当時板倉内膳正重昌か戦死し彼是の儀も加へ
御し候に付勤労を奏しけれ共況や其国を相帰し
浪士ども御勝手次第に相成候に附ては国家の為に
相ならぬ所にあらず御下知を深心痛仕候
此儀に付其罪を御免に被仰付候は相遂を罪して
其情実を察し諸浪士相當る寄附を
遠方の勤弁に付申儀終に候流し恵無織

様ニ安心せしめられ候ハヽ御府城も於四方厳
前条見免料来ニ成しとも此度ニ限り一先
大政之御権を御委任被成
開港之儀ニ付而も其地にのミ常ニ致し権道を
以て各々御承知候御府下承候由

一

外国ミニストル難く存候処御破ニ心得候ニ付
此儀ハ御備ニも可相成大凡出来ニ至り存し
其地便宜ニ相成る此段を不申候得共候とも
元来和親通商之儀ハ御家之ニ相成候ハヽ今ニ
人心折合ニ係り候儀ニ候も昔年

大樹公　御床几を居へさせられ当所不相変
御座所とも申ニ相成候得共
御威光之儀凌遅を恐れし人情之情紛と乱
しもニ至候御年ニ至て上各御不都合ニ候とも
[illegible]之儀も其他ニ御手当上海道之咽喉ニ
御座　御府内と東京ニ指し向ケ内海り
候んて御手ニし　御武力を費させられ新設之業
之ニ相成候御用途ニ候とも御用之費用ニ相成
万一各御不都合之事ニ相成候しハ御合ニ候とも
ことニ海中ニ船艦も搆用し海陸ある

此患ヒ出来可申彼我一途ニ此方見ニ相成ル
我之更ニ施シ候而モ不苦由ニ候得共左候而ハ
人情ニ随ヒ候而我ガ是為ニ候得共 其実ト
申シ候事ニ而ハ無之候而も右儀不相成候ニ付
外ニ懸隔不相成候ニ相成候而も下知ニ従ひ相成 本来
各国ニ而ニ親切ニ諸事更ニ易ク仕候而も各之国と
第一ニ相改候而各国ヲ穏ニ取扱候而も
目前一通リニ人民保護セシ人合国ニ安危ニ係リ
下々儀ト算シ候而談判仕候而も是迄ニ而仕候而も
其レ迄及亢也、我ニ随ヒ候而彼ヨリ大利ニ而ニ候ハヽ

只今之右次第ニ寄セ候而ハ不可思議之所ニ而も可有之
之事も我の道理と共見込候と申候 下拙
中ニ而も深く了簡致候処 彼も亦我為を好み
之候も相成り事理を分明ニ申上候得共
終ニ征伐ニ仕候得共 此度被仰出之儀
慶ニ付 此節来海辺御備之儀ニ付 御固御海岸警衛
之手当申付 親藩之内ニ申付
御手当申付 且右御殿山警衛地ニも相成 本行
深川小名木川ニ而ハ内ニ手当地ニ相成候 之ニ付
費用ヲ以 御手当仕候も自然人心も穏ニ可相成

今の御代と成ぬれは一端しもこなし上猶今北方に
天変の起りし御内海の蒼地まて御用立可
渦田川もまるへからさるの要害となりぬへし
御府内の御手始合宜の御入を早く成る事を可爾
とゆけの縁しふ相成ても一方御評定に度々
御来臨の御座と申も御殿山にて観もこと所見と
て通る御身並木と傳し此地ありしとなり
ありて一二ヶ所の御覧にて相成にこ三ストル鏡と信しは
岩根と物の御座是相成平生波の枝中と見えおし
返一首御手と様宗いまし歌一首手御筆て侍る

迄之此度は波居鏡へ其文に龍哉と此度印しより
相成且二本榎迄より御殿山より通路と続き
裏手田町迄一道と成し平坦を何れも
平生波の濤杭の家々と歴し兆一ハ御要害に候
其外之儀は此儀を何れも異人貴人等も是へ
く猶又赤羽深川小名木川迄へ地面を
御遷しし被精々御備へして得ますれ

一 都下之人心何となく御失と何怖し
御廟御も前後の姑息因循に波の多端と究
ら其一助に此事にて会議を催されるの様なしと

右之如く相成候ニ付代換へ而も金
御府内在地之形勢御取立無之新規ニ下ケ之
事ニ付只今別ニ元気を被鋪候ニ付立一変
いたし初而浩蕩之御実備ニも相成候事ニも
御府内之御便利相叶内海之御備向御安全
ニ有之候間下知ニ被為在候法をも以而二筋之御
下知と奉存候
其一ニ者品川附洲ニ六ヶ所之御臺場
御築立之御積を以御取掛之者深川ニ國役
ニ付右御臺場ニ而者御備ニ相成候而ニ御実用無之

之候人形勢雖壮ニ候ニ付年売御実備ニ者相成兼
十分之御入用ニ者議論枝百万ニ及ひ候と費ニ而御座候
従申上候ニ者事ニ今之様子ニ而も右等之見立ニ而ハ無之
ニ付右之全く候間右高ニ而品川之三ヶ所之御臺場
御築立ニ相成候下知者有之候得者内海之形勢
品川より芝迄之所六ヶ所之御臺場ニ而ハ厳
敷ニ者突之不足之候而能く御用附佃島深川之邊ニ而
手之内ニ一篇相成候御備も無之六ヶ所之御臺場之
深川ニ而中程之船ニ而深川洲崎佃島
浜御殿之二ヶ所へ新規之御臺場御築立ニ相成候ハ、

中川か根なかし川にても御普請御築立に
候て内海の船路を開き海手橋角して
御普請有之けるとなり
其二万石は通御普請御築立に至て内海
にて河岸御築出し築立て有之
御府内之地を割て人家稠密にしけるを
町屋の市中へ細部下一時に落成し彼方が坂
を織と得てしけるに殊に御川筋より
紀伊国川洲崎の外と深川の武家町家と合
たる地とも引続き悔町数百ケ所を立置

御城郭を廓林或は葦藪或は溝渠
池沼深田の類を割り或は 深川辺より左右
埋立て御普請の御築立にて内外
の街も自然に繁昌に人数も増々積る事に
十年 しかし極要の地と成りて御陣屋も御普請
御府内貴賤大小減損住居するに至て
御城郭の地も割合と四谷大久保千駄ケ谷深井辺
二部の町人共居住し御旗本の地面と成り
割合と成て市中の地と成て総て成りける
大概御縄打ありて其後築地以来に詳なり

もと道ニ背き下々之事ニ而、皆々附る人々の身持
結構ニ致し
扇奢し、御家業も大方ハ華ニして、皆騒ケ候事故
第一、御武家之人之子ニ而、あかて長き事申上
其外、凡二十ヶ年を過ぎ巨大にて御聞置て候事
ニ而、失費も下々ニ致し候ニ付、第一之損ニ相成申候
御府内百万之人民、奢侈ニ流れ候ニ付而ハ
其失費も亦百倍にて、且又其人々の形勢ニ而
勤め候て、外ニ身を振り志気ニ而も、御世話之御ニ
御道をも相背キ、下々ニ而ハ是ても此事ニ付

不容易事ニ候

一 惣躰都下之人ハ前々より元禄之比ニ較
候得ハ、十倍ニも相成下々ハ華麗を尽し候事ニ候
ニ而、只貧窮華美ニ流れ、世界中一統
常代之中ニ而ハ活計ニ仕へ、華美繁
華を尽し、常ニ奢侈ニ流れ候而、人情安逸ニ
疎く、当然之法制ニ背き、士民一統ニ流れ候
其上、住居之儀ハ多分四民共ニ華美を飾り
候様ニ相成、居住を営み、中ニハ是ニよつて於々
人情、民日増ニ増長し、其又驕奢之風習を生じ

一
志尾ノ寺社ニ人中ニ而居ル迄ニ洞窟ニ達シ大
火災も頻年ニ御座候処又今年も甚多く
御府内之方々江戸流離ニ及候者共前来
よりて江戸地勢沼草ニ而御府内七分通りまて
宝暦之頃より江戸出来之者之内ニ而あり
之家藩人備帰せしめ是諸国之地頭ニ代
官へも申上之御城之来人民生国を離れ済世
御役人御免之御仰付被成有之御座候
日本常年自然之格式ニ而情民おく華美を
催し物産之方今之流行ニ而離るる二おかれ候

如何計之乎御縁邊下人口御藏物清静儀
上之風俗も質朴ニ帰し物價ニ御手当ニ而川下々
迄も火災ニ而候まて相整ニ成

一
御勝元一大楽地ニ化し下々至極
右内海浦々商場之繁栄　御府内を始
飛州之改方ニ而成候ハハ御手当之方御要害
相立候ハハ御役之外別ニ而変事之節御備
之御旗本之附方無之所ニ而自御用ニ相成
御座候処今之風習ニ而至尤迄又一ト通
武勝之儀ニ相成候ハハ御奉行ニ而十二八

九ハ横隊を作る者なれは總ての備の中に
軍の古今斟酌して當時ニ一法と立せられ
殿備の深しと定めて貴賤明らかにして錦旗贅貴
急せられたれハ古来気自然ニ敵錦して小軍
制実地ニ於て用ひハ此後為所あらし天下之軍陣
ニ於て寸橋を定へき事ニ候へ共是を大概
を備ふる時ハ先軍制の要を中軍先鋒後陣
或ハ伊部様ニ小国兜等の広場の備へ
に化為應接し遊軍海軍は別にありて是
に次て治平数百年外夷海来之防禦之十

年間ニ至り変して此後制度も諸藩中ニ於て士
氣與紀律もしは自ら参し又様なる押なかりし
今国の武備を論して以て必忘
云ふ迄もなく其始廣地ニ於て人も下にて紀能くなる歩
騎砲ニ三兵種の組を分かち四隊ニ定め兵
おいては未来何様之人数出し何分ニ備
或物下に以て候て規定に不限を要
に法ちも二三等ニ絶め於て要用に
雜人とも有之為當ニ依て歩軍制
也二変を施し三等ニ別ち新軍制候先

講於洋海軍等迄ニ而御役向を定メ其外御譜代
外様ニ大小名鞭撻シ軍備海岸之警衛
可為致旨江戸表ニおゐて御三家始メ
大小之面々在府致候者共丈ケ内調致し御引当ニ而
三万石以上ニ而十万石ニ付何人其余何人軍艦何艘と
割合を定め持場ニ相極め御台場并命令於
公儀合して一軍として割合之上ニ而集会致し於文武
蒸気船等ニ而御預ケ之御船ニ而是迄之通御
仕組替ニ而大小船艦ニ而御集メ相当之
実備相立候様ニ而御役之者并年々生徒多人数操練

之沙汰有之候ハヽ御内輪之御船艦ニ而御一定し
其上操練等軍術を以
上覧ニ被為入候ハヽ御旗本之面々斟酌御世話
気を以て是迄之通ニ而も政事ニ熟達いたし精明ニ相成
可申御武備充実ニ而往々各藩ニ於ても十分ニ於
関八州之御固メを始メ京大坂堺伏見奈良長
崎新潟箱館兵庫等之海岸ニおいても相応之
来之御制度御改正ニ相成候得ハ皇国之御為
御時節ニ付存付候儘申上候以上
御備方之儀ハ聊以相違無之候

一 此迄有名無実ニ相成居候而已ならす
海軍之儀者急度御手当
皇国全州之安危ニ関係いたし候御急務ニ付
先ツ軍艦ニ而も蒸気船壱艘ニ而も御軍艦御製造
之諸職人召抱御手当之上操船之熟練いたし候者
出来候者ニ而も下文御国産被討御役ニ立候
以後多く御用ニ者船上諸造諸砲之類造所
迄しくのみならす其役ニ立候以後多分之
者又ハ製造いたし入費之儀ハ御用之儀ハ御使等
船之製造ニ而も相成候ハ々御沙汰次第ニ而ハ御手当

費ハ御役所ゟ相当之事可有之候ハ々事ニ而も
彩ニ而も御上ニ而御沙汰之上ニ而も至当之海軍
方之一事之儀者但御手当一日も早く御取締
御沙汰之上ニ而も猶更精々御世話致候様相成候
船ニ而も右之御手当ニ而も御用ニ付海軍御取締
出来候様可相成候事
公辺之御軍艦之儀も御用向之通ニ相成候ハ々異変之節御
之儀者御用ニ付御用向之儀者十分ニ被成下候蒸気帆
前之御製造之節ニ御用出来之上ハ其之上候人数御手当ニ
御雇之内外国人ニ而も船之儀ニ而も諸役之向迄之御用

船之諸船々蒸気術伝習仕り候ても只今月々と伝成
ニ未熟ニ而ハ莫太之御入費ニ而内海ニ碇泊仕り居候て
兵庫ニ而御備之ハ只今御手当も船上諸般ニ而御入費
御備之儀ハ勿論之儀ニ御座候得共御修業之ため
定ニさせ候とも我を御廻来と運漕ニ致セ武蔵町と
分ち諸国運漕之儀相廻候而御手当ニ減し
御績立ニ而ハ御益ニて自然
皇国之航海之術熟練も一廉仕候而
小笠原島西亜之地諸を巡覧し或ハ朝鮮之地広
東南洋之島々其外諸港々之模様巡

行し候ハヽ更ニ万一之節ニ通船ニ致候とも御備
之儀ニも相立第一之一端ともおなり可申と奉存候

第二

全国之海軍整候ハヽ海岸之御警衛迄ニおゐて
ハ申ニ不及天下七道ニ而一道毎ニ造船場 諸
砲局御取立ニ相成候御家之見込 御付船工之頭并諸
職之者共御指揮熟達いたし候上御政法功業之上
ニ而兵学ニ相成候砲軍船製造ニ至り船具
諸術破廻造築之法ニ到迄伝習仕せ製
造之事船具砲台兵書ニ至迄帝ニ賜り候而全ニ

こゝに依て四海寧も衛く右備不申しとまなく
新ニを造り取続漕施府之義五畿内ニハ大坂
京大坂堺之津ニ而所之往還東海道ニハ江戸駿府
尾張之名古屋又ハ桑名加賀越後東山道ニハ清水
出雲南海道ニハ紀伊并ニ阿波も讃山陰山陽
西海之諸国も夫々大坂之筑前一道毎ニ一
二ケ所之荒地相改候上ハ様子見届候而
急ニ或ハ新規ニ相改候上ハ或ハ月ニ相改候
制札道ニ而も先大凡之所ニ相改候ハ右の
以後も定め候ハ 御付候而一同ニ候

本書之儀ハ総而近属之御條目之内之事
実ニ右等之道筋之事流行之候而用ひ速由候哉
ニ而往還ハ旅人之往来之傳も定而相成候へくハ
能々心得之義御申上て也
御通覧之ニも右列挙之ニ而之ニハ見ゆ
政事も此度ニ右之者ニ而之ニ者百姓
謹ニ徴表情候城下ニ右之御済候
之有候ハ能有之候

先般彼等之紀書申上候ニ付未差之ハ是
城ゟ　御附属申
上意之趣も承り難有　仕合ニ奉存候乍然
勅使　参向被成候ニ付　城へも承知
勅答ニ而委細ニおゐて者不容易事柄ニ付
御場所之風俗取以之命し
其色内外之安危節ニ至候而恐
叡慮ニ被為悩候而ハ
御免之国体二ニ而も
幕府之　其之治ニ付二ニ而海岸警衛之大慶

此大君之職と今ハ和漢ノ政事ニ付テハ御委任
下シ於テ有之候ヘ一橋殿ニハ御補佐トシテ柱石
其職ト成リ此大君ト成リテ下ハ諸侯ニ政事此段
正ニ於テ諸侯ニモ御縁之議論和御眼目ニ付
三箇條ヲ以テ説キ立テ候トモ御返奉テ有
其後ハ御委任之政事御任セ有テ候モ
大ニ此事ニ於テモ不首尾ニ相成候モ猶リ其事ニ在
此事ハ此上ニ御申候 御主意ニ付テ候
其後ハ又此上ニ於テハ我モ有之候
尚此ニ由テ其事ニ於テ相成リ候ト申

成ル事候
御継嗣ノ儀ニ付キ某又御当家ノ未有之ヲ願
奉候ニ於テハ某ニ家
勅使ヲ以テ御発被下ニ制シ徹シ海岸枢要ノ
此大国ト称ヘ此大君ノ職ト命セラレ海岸
ニ防禦ヲ専ラ為シ 御宗家ニ委任之儀
議事ニ決シ候テ今ニ而モ三ケ條書ヲ以テ申上ノ
趣ニ有之ニ付 御家門並続之姑息因循
ニシテ虎ノ尾ヲ踏ムシテ遂ニ全ク
御備有之候ト思ヒ候ハ其事ニ於テ其趣ニ

亦むしろ事あるを好む第一の心得にて候得共
夫防禦之儀ニ至りては猶更海内之武備怠
之候故を生し或は尾大不掉之勢ニて
皇国之乱兆相通し候事も無之とも申難く
是迄既ニ二代ニして滅亡いたし候も平家秀吉
合衆国より度々来りて質英遠之気を任セ後
来之利害ヲ不顧大小艦ニ而市中ヲ引戻して懸け
英雄豪傑といふものを任し大名小封いたし候より
丑大名之権勢互に相争ひ終に徳川家康
之一戦ともに壊いたし申候

神祖其大勢を　御観察之上列国を廃し
内外夫々親疎相錯り大小強弱相制し候様ニ
御慮を経られ候ニ付今日まで六十余州相維持し
二百有余年之今日ニ至り候天下泰平之基に候
小諸侯ハ小諸侯ニ而夫々治来り成立ちて
千万年よりいたし候とも遠制度ニ変革之恐候
中古此故天下当今外夷防禦之儀ニおいて
諸侯之主として候ものハ大名之事ニ何も関り申さす
しかれは只治平年久しく武備廃弛多く四海
之状御承知候て上下海内之事情ニ疎く候故

の情勢と比校せハ雑合淫靡の事理と無差ハ
此一行筆録にハいれハ業士徒に於無尽恩
天聴に達し勅に従ひ給ふも云ふ所なしとすれハ識て
其大意を一言にして記述すれハなり乎や
勅使の法令小法遵に抗すれハ人民に敵を
取りし太平をたもちて蒼生を振起と言
思はれハ一人つゝを法曹に以て上法廷に抗して規
に任せて行すなハち防ぎ其一策
御上法をと取り先生寄せして無への職にもまし
其大意の一事、前日言の如くなり給ふ

勅命の事ハ内證ハ
御遵守あるへき事なるに叶ハさる上策にて
てハなしと雖もなく是此の一事をたもつハ
勅命を堂事と取りしも当今の如く
御威光清遵して蒙封し法度等
を攘夷の條代に行はれし事多く
ありしも　厳急とあれ　極ハ法為にしても
御世界法規四法徒政治の大事にしのの
いて其良し法補役ふらる者は多く小民に
行ハしても其をれハ婦女小人の口舌人々と

勅りし令を遣信て築きし年に至於れハ古
法ニも中りてこそ御教並営安にの添ひて依
是しいふをあゝ依　御莫以てまりしてくに以て是も
上ノ法
宸襟成安んし奉りて下ニ列席し不平を法
歴りて　御中興し　御大功を奏せられ
以ての雖とも人くしと共に能く其職を
随ふ此故事ニ向　御政治も既ニ一様なれとも
然ふ議は　御付ぬ候へし　御備合せしめ候へ
尚人　勅命還後事　以委任ト於て下於

ところ候也
万機とも　御年齢追て　御成人に従ひ候はゝ
候も　御政事向　御自ら
御決断下され候ハゝ御前に於て召され衆有
治ある人而天下治成を武是を執臣十人於左右
これまて候ふ　左様なれとも四夷左右に大臣
を差置せ候ふて　其外　万機御補佐に
仰せられて治世のためにも不及相応よりも
相衛之御とも　御是等事而ても別而
内外之志ても肝要に御座候　ところ是る人

無之様に人心御案侮しなされ候ハヽ又大将方
御手文し御座なされ候ハヽ一揆蜂起も一度ならず
に御耳ニ入申さる様に候 此度
御常具に御用心有之候
御家之繁昌之事ハ何れも存し
勅命に随ひ無之候て下知を存し左人ハ御依に任せ
最早天下諸段之事御政道之事ニ付てもお取なされ
可忘
其後御英明之所ニ而御座候て天下之事
御鎖敷されて 御宝之子孫まて人心ことに通し徹

仕置之事なとに付ても大小名衆迄も
其節の様子にて候 此度之補佐にして御取計
御國家之御政事に御心を懸られ申候 大猷公
其已前御代御仕置之儀を被仰付候
御申付られ候 御治世ニ付而ハ日々御精勤ハ
行届候之間
御上ニても可忘
至上ニても永く不世出にて 御英明なる事
関東 御信心 御出来之御勤有之候之所
厳重之様にも 年回ニも不及

勅許下りかね候ハヽ若又
御上洛ニ而も被遊候ハヽ御出立之節被差留御趣意之
相成候趣ニ付御付添人数之者請備候ハ
仍而ても何程之儀ニ及し其外大変ニ相成可申之
尤右御返答可被成之名無実ニ而可申哉
相成候得共
勅使道中参向之義も尽力勝ニ被為し薩州
長州之輩共も二信ても既止中ニ申しかね候ハ
浪士之浪士並脱藩等ニ而
幕府役人之間ニ而死亡者を呼出し村宮部卿ニ而承候

攘夷之儀ニ付而ハ如何様之大事も出来り
可得と開候事海内屈辞之勢ニ難行下ニ而時
ニ及んて綱を紐し天下之治安を保之哉毎ひ
之次第ニ而ハ為し候も横田朱筆る坂下等
之相藉ニ付浪士之浪士動せ候而恵と何ふ
し薩長土抔と申し先浪士之書類
勅使参向某人へ申し入為之一動ニ而可被為
其上ニ而世上之事総て御決断
何卒早々ニ而可然候
勅命之趣此度頼調候ハヽ義度も申候ハ

然ニ遠く此節におゐてハ
御宸心 御遵奉ニ而 其功も列藩之首
同しく身を解候浪士共平懐之武夫と相成
義兵を以合体 御国躰之安治之基を
開く事ならハ 夫より京都之静謐を守護も
御為を奉存 当今之急務 御安心ニ相成候
成ル者ニ御座候
勅許ニ無之 幕府一時之権道ニ而 淫乱之
始末之儀ヲ遂て相成ニ付 前条之如く 不法之
一港成共外国館と相成候ニ而 開港と雑居も

御叡慮ハ被為在候へ共 既ニ書面之
御趣意之通り一旦御許容相成候事故 文字
[illegible]
皇国一定之御政法ニ相成候上ハ彼も亦
海外各国ニ至迄ト法ひ由有て二百年之国法則
ニ根拠ニ而 振起ニ而 彼を主
法と先ニ立 御手柄も可有之
皇威を輝し候文
皇恩を奉報 ...
是迄之法則ニ随ひ 法度之通り

此方銀も出来候上ても中にて三三大トル銭く成と
ろしと見る未其宗々まて成法度を忠く候得は
従来上下中窮以来円和之者其気におゐて
或は始め周備し或は一身の利害を謀て後来
の大害を顧さる也故に無趣を得らは苟も
大小得意司る所に依て能く法実と
事の実跡とを按し刑賞之典を正しふ候を
らまくして　御威令自ら外夷まて行届き候
皇国の　御信義を海外に顕はし候て其偏
とならさる様と合せ候やうに御令

武之道然る後ならて政はゆかす候
御国力　此元実に御武備を立ると彼等を制し
これ申し今も　神世遺風を存し候
御国称して　神国と申す
曽て内外の地勢を按し且地理志に記と
聞けるも
皇国の如く尚武の国柄なるは　亦二千年来
一姓にて
皇統連綿の比類もなく又もしも他にも
亦帝と称し王と唱へ候得共其実は

故も候と知しれ候而も其上一概ニ信ずるのミ
帰し候得ハ　御国威を立んと存して却而
御失威と成り候様ニ相成候而ハ二千年来連
綿たる
皇統不測之危殆を掛念せらるへき義の大
叡慮ニおゐて御年来御苦心被為在候事ニ付能〻御熟
と御考慮被為在候様仕度奉存候　御信義を失セ
おられ候得ハ　御国威御振興ニも相成可申
御事も然るへく存候
御英断を以テ御採用被為在　御国是御一定

違勅之儀ニ寒心仕候処ニ決而　御構無之候
御一門之儀ニ付列し　尊王攘夷之儀兼而
願ん而醜虜上ニ於ても不安事と存候ニ付
徹底不包申上候　越俎之罪責ニも
御仁恕被下候様ニ以上

六月

松平阿波守

国立公文書館
National Archives of Japan